
銃と少年と非日常

治田 神裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃と少年と非日常

【Nコード】

N00260

【作者名】

治田 神裕

【あらすじ】

それらは唐突に始まった。誰が仕組んだのか、誰の仕業かわからない、神なのか、人なのか、宇宙人なのか、しかし彼らにあるのは生か死という過酷な現実だった、こんなところで死ねるか！このゲームの主催者に一発食らわしてやる！

参加者は日本中の高校生、期限は無期限、生き残れるのはただ一校、青春を血と鉄に捧げた彼らの物語が始まる。

モンスターや人間と戦い続ける彼らはゲームと名のついた生存競争サバイバルを生き残れるのか！？ 駄文ですがよろしくお願いします。

いつか帰るその日まで（前書き）

神が仕組んだのか誰が仕組んだかはわからないまま生き残りをかけて戦うこととなった 折原 良也 仲間と銃をかり非日常の世界を生きる、『絶対生きて帰るぞ……』だからそれまで死ぬなよ teme ら！！！』

異常な世界で仲間と生きる学園青春物語。

お楽しみいただければ幸いです

いつか帰るその日まで

舞台は日本　あるとき突然日本中の高校が消失した。日本中が混乱する中政府に送られた一通の文章。それに書かれていた内容は神は誰に微笑むか

というただ一言だった。

これにより神隠しなどとマスコミは騒ぎ立てたがさらに送られてきた文章を見て凍りついた。

消えた彼らのうち戻って来られるのはたったの1校のみ

消えた高校生の内戻ってくることは一校千人程……数十万人に及ぶ彼らの死闘が^{サバイバル}始まった。

消えた高校生を待っていたのは日本であった、しかし彼らの他に人は存在せず、街は倒壊しており廃墟と化した街々には狼といった生き物が住んでいる所が彼らの居た日本との違いだった。

始め彼らは自分達の置かれた状況が理解できなかったがやがてある地獄を見ることがなり全てを理解することとなる。

~~~~~GAMESTART~~~~~

空に現れたそれが全ての始まりだった。  
そして一年後

## 闘い（サバイバル）（前書き）

とりあえず連続投稿です、今のところ週一で投稿の予定です

## 闘い（サバイバル）

~~~~~ GAME START ~~~~~

それが何を意味するのか理解できた者はいなかっただろう、俺もまたそうだった、ただ気付いた時にはすべてが始まっていた。

「ダメだ！防ぎきれない！」

「弾が足りないぞ！」

「誰か援護してくれ！」

あらゆる悲鳴や怒号が響き渡っていた。場所は学校から三百メートル程離れた通りだ。

そこでは高校の制服を着た男子生徒が銃を持って闘っていた。

『部隊に連絡、増援としてT部隊を送った！学校前で合流しろ！』

そんな中一人の男子が持つ無線からそんな声が聞こえてきた。

『前線、了解！』

男はそう返事すると周りに大声で指示を出し始めた。

「今から丁部隊の奴らがでかいのをかますから校門まで引くぞ！怪我人を纏めたら狙撃部隊とマシンガン持つてる連中は援護しろ！」

その指示を周りにいた生徒が実行する為に走りだす、そしてその動きはまるで熟練の兵士を思わせる程だった。

「鬼が来るぞ！」

「撃てえ！」

「ガガガガッ！」

指揮官らしき男の声で一斉に弾が撃たれる、彼らが相手をしているのは一言でいうならば鬼であった。周りにらさらに狼らしき死体が転がっている

「ブオオオッ！」

撃たれた仕返しとばかりに鬼が吠えると近くにあったコンクリートの塊を投げてくるそれに反応して落下地点からは「退避！」といった声が聞こえてくる。

「隊長！怪我人の収容完了しました」

「わかった、それじゃあ全員に連絡、煙幕を張って引き上げる、スモークを張ったら近くのトラックに乗り込め！乗り遅れやがったら置いていくと伝える！」

「了解！」

指示を受けた男が無線に向かって指示を出し始める、一方、指示を出した男はトラックに乗り込んでタバコを吸い始めた。

よく見ると高校生らしからぬ風貌をしているが彼は列記とした高校生だ。

鳳凰学園 三年D組所属

松川 大輝 通称 ボス

通称に関しては見た目もさることながらタバコを吸っている姿とどつしりと落ち着いていることから名付けられている。

そして素手で熊を殺したと言われる程の巨漢でもある。

「隊長！準備完了しました！」

松川がそうしてタバコを吸っていると先程指示を出した部下が走ってきた

「おう、わかった、それじゃあ野郎共！準備はいいか！？」

「「「いつでも！」「」「」」

「スモーク展開！おら！テメェら尻まくってとつとと逃げろ！！」

そう言つて松川は部下達が脱出していくのを確認すると最後に戦場を離脱した。

「隊長、松川部隊が見えました」

「鬼は？」

「見えました、数は三体、少し多いですね」

「距離は？」

「約二百メートル」

「仙崎に連絡、松川の部隊がラインを越えしだい砲撃開始せよ」

「了解、仙崎さん、松川部隊がラインを越え次第砲撃開始せよとのこと」

「仙崎了解！」

指示を受けた男、仙崎 進は周りに指示を出し始めた。

各隊長に連絡！俺の合図と同時に砲撃開始、しくじんなよテメエらあ！

「了解！！」

仙崎の指示に威勢のいい返事がかえってくる。

「仙崎さん、松川部隊がラインを越えました」

「了解！ 砲撃準備！………撃てえ！」

瞬間、轟音が辺りを包んだ。

「全弾命中！」

「松川部隊の收容急げ！」

「目標は？」

「ただいま確認中！」

大声が響く中……煙が晴れてくると鬼の姿は無くなっていた。

「目標の撃退成功！」

「鬼は完全消滅した模様」

『作戦終了！被害報せ！』

総指揮官の声が流れ、一日の戦闘の終わりを告げた。

あれからこのような戦闘が毎日のように繰り返されるようになった。

あの日のことは昨日のように思い出せる、異変が起きたのは昼だった。

教師が4時間目の終了を告げた瞬間、世界は変わった。

まず教師が消えた、一瞬皆は目を疑ったがしかし現実が変わらなかった、皆、始めは驚いたものの次の瞬間にはいつもの昼休みが始まっていた。

しかしそんな平和は5分と持たなかった。

まず外を見た生徒が違和感を覚えた。

次に携帯をいじっていた生徒が携帯がつかないことに気がついた。

そして、学園から教師が消えてしまっているのに気がつくに至って騒ぎが始まった。しかし、大半は状況を上手く把握できずに呆然としていたが、そこに校内放送が流れた。

『生徒の皆さんは至急講堂に集まってください』

聞いたこともない声だったがようやく事情が分かると思った生徒達はその放送に従った。そして俺もそんな一人だった。

「なあ、一体何だと思う？」

「さあ、停電したんじゃねえの？」

周りは呑気な会話を交わしていたが俺は嫌な予感がしていた。

そして講堂につくとその予感が的中していたことに気付いた。

『高校生の皆さん、あの世とこの世の境目へようこそ、皆さんにはこれからある選択をして頂きます、なお選択することには個人の意思を尊重させて貰うことになります』

講堂に入った俺を出迎えたのはそんな声だった。

いきなり、意味不明なことを言い出したその男？に疑惑の視線が集まったがそいつはそれらの一切を無視して話を進めた。

『選択とは簡単です、これからある試練を皆さんに与えますがそれを受諾するか否かで拒否するかどうかという人は手を挙げてください』

いきなりの男の言葉に皆戸惑っていたが、誰も手を挙げなかった。

『ふむ、全員承諾ですか……』

男はうなづくと何やら話し込んでいる様子を見せたがやがて天井にこんな文字が表示された

~~~STAGE 1 CLEAR!~~~

「……………は？」

俺は不覚にも間拔けな声を出して固まってしまった。いや、俺の周りもそうだったのだから仕方なかったのかもしれない、何故ならいきなり頭上に文字が現れたのだ、たとえ正常な時であろうと反応は同じであっただろう

しかしその後やつから告げられた一言が全て吹っ飛ばした。

『皆さんにはこれから命を懸けて戦って貰います』

ミッションスタート！

「おい良也！聞いてんのか？」

そこまで思い出した所で俺は意識を現実に戻した、声のした方をむくと友人の桐原がいた。

「何だ桐原？」

「会長殿が御呼びだによ、今から校長室に來いだそうだ」

「俺が？」

「ああ、とつとと行け 俺は飯食ってっからいつものとこに來いよ」

「わかった、……………どうせろくなことじゃねーだろうが」

俺は桐原に返事をして校長室に向かった。

(コンコンッ)

「入りたまえ」

ノックをすると嫌ったらしいほど落ち着いた声で返事があった。

「……………失礼します」

とりあえず形だけでも敬語を使っておく

「来たか……………まあ座りたまえ」

そう言つて尊大な態度で椅子を勧めてきたのでおもいつきり音を立てて座つてやった

「……………機嫌はよくないようだね」

「そりや仕方ないだろ？それよりお前だけか？」

俺が問いかけると会長——移川 渡 はうなづいてみせた、

「安心したまえ、ここに居るのは君と私だけだ」

「……………気味の悪いことを言つな、そしてその言葉遣いを辞めろ！？」

「それは無理だね、俺が私で有る限りは変わらないさ」

「胸を張つて意味不明なことを言つな！」

俺が私で有る限りつてなんだよ！

「まあ、落ち着きたまえ折原氏、コーヒーでも飲むかい？」

「飲む！そして口調を統一しろ！」

さつきから無駄な会話ばかりだな

奴はコーヒーを二人分入れて来て俺の前に置くと真剣な顔をして話し始めた。

「さて、今日君を呼んだのは他でもない、君達の部隊にあるミッシオンを頼みたいからだ」

「素直に命令だと言え、指令と言えばわかりやすいだろ」

俺がそう言つと奴はやれやれと首を振った。

「わかってないね、指令ではなくミッションだよ、スパイ大作戦を見たことがないのかい？」

ない、それに解りたくもないわ！

そう思つた俺だったがぐつと堪えて話を進めることにした。

「それで？今度は何をすればいいんだ？ジャンプの確保か？それとも鬼の捕獲か？それとも野良猫集めか？」

俺が今までやらされたことを挙げていく、どれもなくなものじゃなかったが

「何を言っているのかね君は、私が一体いつ、そのような作戦を命じたりした？」

「三日前だ！そしてこの会話自体八回目だ！」

こいつの頭は何が詰まっているのか見てみたいな……ろくなもんが入っていないだろうが

「まあいい、それより私が頼みたいのはオペレーション6だよ」

「おいまして、ミッションじゃなかったのか？」

俺がツツコムと奴は怪訝そうな顔を向けてきた。

「何を言っているのかね？時代はオペレーションに決まっているだろうに」

初耳だな

これがこいつの特技、ロストメモリー、まともにこいつが会話の記憶を持っていることはない、

それはさておき

「で？そいつは何をすればいいんだ？」

「何、簡単なことだよ、ここから三キロ先のスーパーから食品を運んで来て欲しい、むろん輸送部隊はつけるよ」

サラッと無理難題を押し付けやがった。

「何だよそれ、食料は学園の倉庫に備蓄があつた筈だろ、なんでそんな急に必要なんだよ」

とりあえず、少しはマシな指令のようなので、聞き流さずに疑問をぶつけてみる。

「それが、賞味期限が厳しいものばかりでね、それで急遽食料の入手先を搜したら確か偵察部隊の話ではあそこはたくさん食料品があつた筈だと思い出してね」

驚いた、存外まともな理由らしい

「わかった、とりあえずいつまでにだ？」

「あさつてまでにだ、とりあえず給料日までの一週間を乗り切れる量があればいい」

「わかった、了解した、作戦は明日行ふ、輸送部隊は明日の朝に校門前に集合させといてくれ」

「わかったでは頼むよ、なお、諸君らがどのような状況に陥ろうと、当局は一切関知しないからそのつもりで、なおこのテープは自動的に消滅する」

「……………」

「グハッ!？」

最後に調子に乗った馬鹿を締めて終わった。

## 第八特別小隊（前書き）

とりあえず色々キャラが出て来るので、人物紹介表を作ります。

## 第八特別小隊

校長室を出た良也は食堂で食事を済ませると図書室に向かった。

「おい高原、メンバー全員集める任務、いやミッションだ」

「了解、今度は何だ？」

「結構マジだ、急げ」

「了解、」

と、そのまま良也は図書室を抜けると倉庫に入った。

部屋の名前は第一蔵書室だが現在ここは良也が隊長を勤める第八特別小隊の本拠地となっている。

良也が中に入ると三人の男子生徒がいた。

「おい良也、会長に呼ばれたらしいじゃねえか」

「ああ、任務だ、だがそれは全員が揃ってから話す」

良也が部屋に入るなり一人の男子が声をかけてくる。

彼の名前は山下裕也小隊の戦闘隊長だ、父親が自衛隊員ということもあるのか戦闘に関してはピカイチだが、少し残念な面がある。

「どうせろくなことじゃないんだろ？俺あ寝るぞ？」

「まてペコ、今回はマジだから寝るな、とりあえず起きてろ」

「誰がペコだよ！？」

彼の名前は上田、以上

「……………なんか扱い酷くないか？」

「気のせいだ、それよりブリーフィングを行うから片付けろ」

良也は上田にそう指示すると地図を取り出して眺め出した。

「何だ折原、また任務かよ三日前にやったばかりじゃねえか」

「俺もそう思うが、事情が事情だからな、早く準備しろ永松」

「りょゝかいだ」

間延びした返事を寄越すと永松はテーブルを並べ始めた、ちなみに部屋は教室の二倍近くあるので狭くはない。

部屋にいた三人が動き始めたのを確認すると良也は地図を眺めて作戦を立て始めた。

「では、ブリーフィングを始める」

30分後、部屋には20名近い男女が集まっていた。

「まず、今回の任務だが 食料の確保、並びに護送が主な任務となる、場所は3キロ先の中型量販店、そこで全校生徒一週間分の食料を確保するのが第一段階、次にそこから食料を運ぶのが第二段階となる、そこで隊を二つに分けることにするが……何か質問はあるか？」

良也が周りに問い掛けると一人の女子生徒が手を挙げた。

「……その辺りはウルフの縄張りの筈です、なのに何故わざわざ危険を侵してそこまで行くのですか？」

「いい質問だな、成宮さんの言う通りこのあたりはかなり多くのモンスター、とりわけウルフの存在が確認されている、が 代わりに鬼<sup>オガ</sup>がいない上に道路が舗装の綺麗なまま通ってるんだ、さらに他校と勢力圏が被っていないからな、ただし、未確認だがロスターの存在が確認されているので全員注意するように」

良也の答えを聞いて、成宮は座った。

「他に何か質問はあるか？」

良也が尋ねたが、誰も手を挙げなかった。

「なら先程の続きだ、隊を二つに分けると言っただよな？　今回は俺が率いる先遣隊と護送班に分ける、先遣隊は俺、高原、桐谷、山下、ペコ、結城さん、鈴浦さん、佐藤さんの七人で行く、残りの成宮さんの指揮でトラックを護衛しながら来い、サポート班は基地で無線連絡を頼む、決行は明朝だ、護送班は連絡があるまで待機だ、それじゃあ、任務開始だ！」

「「「「おうつ！（はい）」」」」

こうして任務第七号が開始された。

## 人物紹介（前書き）

人物紹介です

## 人物紹介

主人公、折原 良也（18）

主人公、クールな性格だがツツコミを入れたりするなど相手により裏表が激しい一面がある。

第八特別小隊の隊長

戦闘員 桐原（18） 良也の友人、銃ではなく刀や槍を好む。

山下 裕也（18）

戦闘隊長 あらゆる武器を使いこなし中距離での戦闘は無敵を誇る。

上田<sup>ペコ</sup>（17）

扱いが酷い戦闘員 狙撃が得意である。

永松（18）

特殊戦闘員、壁を登ったり爆発物を仕掛けたりする特殊戦闘員である。レンジャーのようなもの

桐谷（17）

戦闘員 副隊長だが基本的に全て山下に委任、いわゆる縁の下の力持的存在である。

成宮 (18)

女子部隊の隊長、クールな性格で狙撃を得意とするがひそかに可愛いものに目がないという一面も持つ。

結城 (17)

副隊長 ミス鳳凰でもある第八特別小隊のマスコットの存在、普段はやさしいが戦闘時はスイッチが変わる、女子最強の戦闘力である。

鈴浦 (18)

戦闘員、主に後方支援を行う、また料理上手であり彼女の料理はよく男子の間で奪いあいになる。

佐藤 (17)

情報員 本部との連絡や周辺情報の收拾など戦術面を支える、戦闘時以外は無口であるがそれは男子限定で女子とは普通に話す。

戦闘初日〜BATTLE THE URUFU(前書き)

戦闘シーンが会話ばかりに……駄文ですがどうぞ

## 戦闘初日〜BATTLE THE URUFU

「よし、全員揃ってるな出発するぞ」

翌日の朝5時

良也を含めた八人は出発した。

「それじゃあ、成宮さん残りの連中は任せたよ」

「了解しました、」

別部隊の隊長である成宮に声をかけると良也達は達が出発した。

1キロ地点     ゲート

「我々は第八特別小隊だ、任務で3キロ先まで輸送隊を護衛する為に来た、通過許可を！」

「……了解、許可する」

「感謝する」

「……幸運を」

学校を出て1キロ先に行くと、何やら鉄柵が張ってあった。

上田<sup>ペコ</sup>「おい、何だここ？」

桐原「しらねえのか？ここがゲートだ、守ってるのは第六特別部隊の木崎守って奴だ」

上田<sup>ペコ</sup>「……そのままの名前だな」

桐原「別名、鳳凰の防人」

上田<sup>ペコ</sup>「凄いのかイマイチよくわからん名前だな」

良也「おら、とつとと行くぞ」

許可を得ると良也達は冊を越えた。

「さて、全員武器を構えろ、ここは危険レベル3地点だ、ゲートを越えたらどこにモンスターが居てもおかしくないと思え！ここは通称 狼の巣だ、死にたくなければ 警戒を解くなよ」

「了解！」「」

皆が武器を構える、

そのまま進むこと20分、良也が全員を止めた。

良也「ウルフだ、数は三体だがあいつらは見張りだ、ペコ、狙撃で

奴らをかたずける、他の連中は十字の陣だ！クロスファイヤをかける」

「『『おう！』『』」

刀を持った桐原と桐谷が全面に出てその後ろに別れて、山下と結城さんがつく、永松と鈴浦は上田の援護につき、佐藤は良也の後につく

「よし、それじゃあ……始まりだ！」

良也が命令を下すと同時に上田のライフルが火を噴く、最初の掃討戦が始まった。

まず上田が素早く連射して二匹目のウルフを倒したが、残りの一匹がすでに吠えていた。

「ウオーン！」

次の瞬間、上田が倒したが、声は周りに響いていた。

「『『ウオーン！』『』」

周りから返事が返ってくると、一斉にウルフが跳び出して来た。

山下「来たぞ、2時の方向だ！」

良也「数は？」

永松「およそ20！」

「山下と結城さん、合図したら一斉射撃、ペコ！お前は周りを見張れ、鬼がでたら撤退しかないからな！」

「了解！」「」

山下「ウルフが来たぞ！」

良也「撃てえええ！」

「ガガガガッ！」「」

二人のマシガンが火を噴く、それをまともに受けたウルフは体中に弾丸を受けて、血を流しながら倒れた。

良也「次は？」

佐藤「12時の方向！」

良也「永松が迎撃しろ」

永松「……了解」

永松の銃が火を噴く、

「キャウンッ！」「」

そのたびにウルフは倒れていった。

良也「佐藤さん、群れの指揮を採ってる奴がいるはずだから見つけてくれ、見つけたらペコが狙撃しろ！」

「了解！」

周りからは次々とウルフが湧いてきていた。

佐藤「8時の方向に数15」

良也「桐原と桐谷で迎撃しろ！鈴浦さん、援護してやってくれ！」

山下「折原！こっち、弾切れだ！」

「俺が変わる！その間に弾込めろ！」

良也は山下と交代するとマシンガンの弾を水平にばらまいた、あまり命中はしないがウルフが怯む

結城「折原さん、弾切れです！」

良也「くそ！山下！まだか！？」

山下「もう少しだ」

良也「仕方ない、ペコ！結城さんの変わりを！」

上田「おうつ！」

山下「折原！数が多すぎるぞ！」

必死に食い止めていると山下が叫んだ。

良也「分かってる、山下手榴弾を、後退しながら波状攻撃をかける」

山下「了解」

良也「よしいくぞ……………今だ！」

良也の声を受けて山下が手榴弾を5つ程ピンを抜いて投げこむ、

(ドッゴーン！)

派手な爆発が起きる、それにウルフが怯んでいる隙に後退する良也達。

良也「陣形は二重に変更だ、急げ！」

良也に急かされて全員が銃を取ると構える。

良也「よし、今日は敵を減らすことだけ考えろ、佐藤さん、本部に弾を送るよう伝えてくれ」

佐藤「了解です」

良也「よし！それじゃあいくぞ！」

その声と同時にウルフ達が飛び掛かってきた。

ゲート付近 避難基地

良也「みんな、お疲れ様疲れてると思うが、武器の点検と弾の補充だけはしといてくれ、終わった奴からシャワーを浴びて寝てもいいぞ」

あのと、弾が切れるまで戦った良也達はゲート近くの避難基地まで引いてきていた。

桐谷「結局、ボスは倒せず仕舞いだつたな」

山下「仕方ねえよ、敵が多すぎたからな」

桐原「何体倒したんだ？」

永松「約八百匹だ」

上田<sup>ペコ</sup>「そんなに!？」

良也「ああ、ただあいつらも最後はあまり出てこなくなったから明日は楽だぞ」

桐原「うげっ、それでもまだそんなにいるのかよ」

山下「落ち着け桐原、せいぜい百匹いれは多いくらいだ」

良也「そうだな、明日は行けそうだな」

良也はそういうと寝袋に入った。

## 市街戦

上田「あっ！逃げた！？」

翌朝、装備を整え、弾も補充し、休養もとって万全な状態で再び進んだ俺達だったがウルフに遭遇した瞬間、相手は逃げ出した。

山下「折原、どう思う？」

山下が尋ねてくる。

良也「ウルフはバカじゃないからな、同じことをしたら昨日と同じことの繰り返しだと分かってるんだろ」

山下「では、戦いを避けたということか？」

良也「そうともとれるし、そうともとれない、ウルフは非常に仲間思いらしいからな、仲間の敵をとろつとするだろうから諦めていない可能性が高いだろうな」

山下「と、いうことは……」

良也「ああ、罠を張ってるかもしれないが別の場所で仕掛けてくるだろうな」

佐藤「しかし折原さん、期限は明日までなので時間がありません」

良也「ああ、こうなったら罠があるうとなかろうと行くしかないな、佐藤さん、輸送部隊にゲートで待機するよう指示を、成宮さんに知

らせておいてくれ」

佐藤「わかりました」

良也「よし、それじゃあ進むが、刀を持ってる桐原と桐谷を前衛にして進むぞ山下と結城さんはその後ろに、ペコと鈴浦さんが後方を警戒永松は遊撃で俺と佐藤さんと一緒に中心にいる」

良也がテキパキと指示を出すと全員がそれに従って動く

良也「よし、進むぞ」

良也の号令と共に前進を開始した。

山下「見られてるな」

永松「ああ、」

結城「やっぱりそうですか？」

あれから二キロ程進んだが、良也達はウルフの者と思わしき視線を浴びていた。

「もうすぐ街に入るぞ」

旧市街地、アーケード街

佐藤「目標までもう少し、そろそろ着く筈です」

市街地に入り10分程してから佐藤が報告した。

それを受けて良也が指示をだす。

良也「佐藤さん、輸送隊に出発するように連絡を、ウルフへの警戒を怠らないよう成宮さんに伝えて、山下ウルフが襲って来て食糧が食べられたらマズイ、こちらから仕掛けるぞ」

佐藤「了解しました」

山下「分かった、桐原、永松とペコを連れて先行しろ、目標についてたら、永松とペコを残してこちらに合流しろ、桐谷と結城さんは待機、周りを警戒してくれ、鈴浦さんは戻ってくる桐原の援護を頼む折原、後方の警戒は任せるぞ、永松とペコがポジションをとったらこちらから仕掛ける」

「了解！」「」

桐原と永松とペコの三人が走り出す。

周りを見るとウルフ達が建物の中を通りながら追ってきていた。

良也「佐藤さん、輸送隊はどのくらいで到着すると？」

佐藤「道路が舗装されていますし、私たちが安全を確保して来たので10分程かと」

そう言いながら彼女も銃を構えている。

良也「桐原、建物の側はお前の担当だ、上から来るぞ、気をつけろ」

桐谷「了解っ！」

そのまま警戒しながら進んで行くと桐原が戻って来た。

「グルルッ！」「」

その瞬間、周りの唸り声が大きくなった。

良也「来るぞ！」

良也が叫ぶ。

「ウオーン！」

群れのボスらしきウルフの叫びを合図に、一斉に建物からウルフが跳び出してきた。

良也「攻撃開始！」

銃声が廃墟と化した街中に響いた。

## 市街戦2

良也の号令で放たれた弾は数体を倒したが残りは建物の陰に隠れてしまった。

山下「くそっ！遮蔽物が多すぎる！」

桐谷「上だ！」

山下が悪態をついた瞬間、上からウルフが降っていや飛び掛かってきた。

山下「ちっ！」

ダンッ！

山下がピストルで額を撃ち抜く、たいした反応速度だ。

山下「桐谷、上から来る奴は任せるぞ！」

そう言うとき山下と結城はいつのまにか正面に迫っていたウルフに向かって発砲する。

ダダダッ！ダダダッ！

短い射撃音が連続して響く。

良也「桐原！急いでこちらに来い！鈴浦さん！援護を」

鈴浦「判りました」

桐原に迫るウルフに向かって発砲する鈴浦。

「ギャウンッ！」

悲鳴をあげて絶命するウルフ。

それに怒って周りにいたウルフが飛び掛かってくるが格好の的だった。

ダダダッ！

さらに弾丸が放たれウルフは犠牲を増やした。

それを見て真正面からは不利だと悟ったのか、群れのボスらしき声が響くとウルフ達は攻撃方法を変えて側面から、建物から飛び掛かってきた。

上から下からと次々とウルフが飛び出してくる。

それを良也達は一匹、一匹倒していくがかなり迫られる。

今のところ桐原と桐谷が刀を振るって近くにきたウルフは倒しているが、すぐに疲れてゆくだろう

ここは不利だと判断した良也は先程永松とペコを派遣したポイントまで進むことにした。

良也「山下、永松達から支援を受けられるポイントまで進むぞ、佐

藤さん、あいつらに援護するように連絡を」

「了解！」

良也「結城さんは桐原と鈴浦さんは桐谷と山下は殿を、俺と佐藤さんで一氣に進むぞ、互いにカバーしろよ、……行け！」

「了解！」

良也の声を受けて皆が一斉に走り出す。

当然、ウルフがここぞとばかりに襲ってくるが、殿を勤める山下がマシンガンの弾をばらまいて牽制する。

ガガガガガガッ！

フルオートで弾を撃ち尽くすと山下はハンドガンに持ち変える。

仕上げて手榴弾を投げて自分も走り出す。

手榴弾に怯んだウルフは追って来れない。その間に悠々と良也達は永松達と合流した。

永松「折原、どうする？バズーカでも建物にぶち込むか？」

良也「あまり道路を破壊したくないんだが……」

山下「だが、あいつら建物の中だからな、こちらから入って行くのは自殺行為だぞ」

良也「だろうな、だが輸送隊のトラックが通れるようにしないといけないからな」

結城「なら、離れた場所に誘いこんだらどうですか？」

良也「成る程！ここで戦うことしか考えていなかったな、永松！」

永松「なんだ、折原」

良也「爆薬はあるか？」

永松「あるにはあるが少ないぜ？ボロボロのビル一つを倒壊させるのがせいぜいだな」

良也「そうか、あるんだな」

良也はそう言うのと佐藤にいくらか質問を始めた。

良也「輸送隊の到着は？」

佐藤「あと5分です」

良也「近くに開けた場所は？」

佐藤「旧中心街の中心、ここから三百メートル先に公園があります。」

良也「分かった、なら作戦は決まった。山下、永松、よく聞け」

良也は二人に作戦を話した。

## 市街戦決着（前書き）

とりあえず話しは一段落、日常パートに入ります

## 市街戦決着

良也「撃て！撃ちまくれ！」

ガガガガッ、ガガガガッ

良也の叫びを受けて全員がマシンガンを撃ちまくる。

毎秒、百発近い弾丸がウルフ達に襲い掛かる。

「ギャウッ！」

悲鳴をあげてウルフ達が倒れる。先程の場所と違い今いるのはスパーの前、遮蔽物がないため面白いように命中する。

しかし……

「ウオラァッ！」

桐原が刀で飛び掛かってきたウルフを斬る。

先程から桐原と桐谷が刀を振るう機会が増えてきた。

遮蔽物がないかわりに敵、つまりウルフが散開して押し寄せてくるからだ。

こちらは七人永松が抜けている今、かなり状況は厳しかった。

山下「折原！そろそろ弾がないぞ！」

結城「こちらもです」

ペコ「俺はまだあるぞ」

桐原「俺の俺のを使え」

桐谷「俺の分もあるぞ」

良也「よし！後一分持たせろ！ペコ、引き上げ準備、合図したら弾が切れるまで撃って目標まで退避だ！気を抜くな！」

「了解！」

全員が一斉に返事をする。互いにカバーしながら弾を補充し始めた。

（……………頃合いだな）

良也「佐藤さん合図を」

佐藤「判りました」

良也「よし！それじゃあ、いくぞ！撃ち終わったら走れよ……………撃て！」

ガガガガガガガッ ガガガガガガッ、ガガガガガガガッ、ガガガガガガガッ

一斉に弾丸が放たれるその弾幕にウルフがやられてゆき、他は建物の陰まで下がる。

良也「撤収！」

良也が叫ぶと全員が武器を棄てて走りだした。

それに虚をつかれたウルフ達は一瞬固まったが、次の瞬間には勝利の雄叫びをあげながら追ってきた。

良也達が逃げ出したと判断したようだ。

しかし……それは罠だった。

ウルフ達が良也達を追って廃ビルに入った瞬間、

（ドカーン！）

爆発音と共に、

ガラガラガラガラ！

ビルが崩壊した。

ズドン！

群れの後にいたボスは助かっており、逃げようとしたが……

「GAME OVER」

永松によって仕留められた。

ターンッ！

ウルフのボスを貫く弾丸が発射された音が廃墟に響いた。

SIDE 良也

永松がウルフのボスを撃ち抜いた瞬間、上空に

STAGE 4 CLEAR！

の文字が現れた。

それを見た瞬間、俺は理解した。

「……………あのやろっ」

そう、今回の任務の目的はおそらく嘘ではないだろう、しかし 真の目的は良也達、第八特別小队による、ウルフの群れ、及びボスの駆逐によるステージクリアだったのだろう。

「………… 上等じゃねえか、あの野郎！」

俺は奴への呪詛の念を抱きつつも、任務を達成するために指示を出した。

任務完了、これより帰還する

「……言い訳を聞こうか」

「想定通りだよ」

パンッ！

一発の銃声が響いた。

良也がバカ（会長）に向けて発砲したのだ。

「危ないね、何をするんだい？」

「……ちっ！」

しかし弾は当たらなかった。

「相変わらず、チートな力だな」

「会長だからね、このくらい当然さ」

このゲーム、会長が倒されれば負けなのだが、何故か会長には銃の類いが当たらない用で今撃った弾も、不自然に外れていた。

「まあいい、とりあえず任務は果たしたぜ」

「ご苦労様、一週間は休んでいいよ」

「そうか、そいつは朗報だが……次は何だ？」

俺は現在のステージのクリア条件を尋ねた。

ステージクリアの条件は会長にしか告げられないからだ。

ちなみに現在はステージ5であり。

ステージ1は意思統一

ステージ2は一ヶ月生き残ること

ステージ3は鬼五体の撃退

ステージ4はウルフ及びウルフのボスの全滅

ステージ5はまだこいつしか知らない。

「まあ、それについては君達に動いて貰うよ」

「成る程、いずれにしろその時話す……か」

良也はそついうと校長室を出た。

「さて、こいつはきついね」

良也が出た後そう呟いたのは会長の移川 渡（うつしかわ、わたる）である。

彼が見つめる先には次のクリア条件が張られていた。

ドラゴンの討伐、もしくは捕獲。

「……………彼らにできるか……………」

不安を抱えながらも希望もあった。

攻撃魔法を解禁とする。

ミサイル  
誘導兵器を支給する。

魔法、これがどれだけ力になるかが決め手となりそうだった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0026o/>

---

銃と少年と非日常

2010年10月11日19時08分発行